
光と記憶へ捧ぐ鎮魂歌

紅姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と記憶へ捧ぐ鎮魂歌

【コード】

N0189U

【作者名】

紅姫

【あらすじ】

古代ギリシアに召還された外見は女だけど中身は男の主人公。ある事件をきっかけに見始めた悪夢とそれに伴う精神衰弱。はたして・

スプリガンとの組み手

暗い暗い闇夜の中・・・雪はこれが夢だとぼんやり理解していた。

周りを見ると赤い染みが無数に広がってるのが見て取れる。それを見ながらまたなのね・・・と呟いた

多くの人・・・命あつた者達の姿が・・・灯火が消えていくのを感じる

多くの奪っていった命が・・・魂が・・・見つめてくる

それと同時に一人の男の背中が離れていくのが見えてくる。

それを見つめながら、一人の女性が追いつけない後ろ姿へ

「私を置いていかないでー」

叫んだのを感じた。

そこまでで同時に意識が一気に覚醒する。

「ハアハアハアハア」

パイプベットの一人で一人の少女が涙を流しながら目を覚ました。

「くそ、最近、内容は覚えてないのに同じ夢ばかりだ。」

携帯電話で日付を確認する。 2011年9月19日AM10時

に顔を殴り飛ばされた。

「ゴフア」

とどこの世紀末ですか？いくらくらいの速度で地面を転がっていくが次の瞬間には雪の姿はその場から瞬歩にて消えており、ジャンの後ろに移動そのまま、魔力を拳に展開しジャンへ打ち込む。ジャンはすでにそこには存在してらず、

「な!？」

叫んだと同時に腹を殴られて

「グフツ」

反撃しようとしたときには既にそこにはいない

「おせええよ」

右頬を殴られ

「ガッ」

そのまま20m近くジャンに吹飛ばされて転がっていく。

1時間後・・・

「お前、相変わらずオセーな。俺じゃなかったら10回は死んでるぜ?」

「いあ、本当に魔法、体術全部注ぎ込んでも姿すら霞む速度で移動とかどこのチートだよwそんな人に遅いと言われても・・・」

「ジャン先輩、女性の顔平気で殴っちゃうほど鬼畜なんですね」

「ああ？お前、男のくせにグチグチいってんじゃねーぞ？次は御神苗相手だろ、逝ってこい。」

漢字が違います、ジャン先輩・・・

先ほどのように山本さんが用意できたのを確認してから開始の合図をする。

《瞬歩》を使い一気に御神苗さんの背後に廻る、その反動を使い右の中段回し蹴りを打ち込むが背中を押し付けられて距離を0にされ威力を潰される。背中を押し付けられたと同時に鳩尾に肘を叩きこまれた。

体がくの字に曲げられた所で、掌底を顎に打ちつけようと迫ってくる。それを間一髪で《瞬歩》で避ける

まじか・・・瞬歩の攻撃にあわせてカウンター当ててくるとかありえないだろ・・・

こうなったらちょっと反則気味だけど・・・

複写眼を使い、存在の力を魔力に変換していく。そしてそれを体の表面に張り巡らしていく。

《暗黒魔闘術》

瞬歩で今度は御神苗さんの前に立ち、音速に近い速度で攻撃を打ち込んでいくが・・・当たらない。なぜ？

そのまま、目が覚めたのは訓練場のベンチの上だった。顎が痛いって事は、顎に打撃くらったんだろっな・・・

はあ、あの二人に勝てる人っているのかな？

「おう、大丈夫か？雪。お前まだまだな・・・まあがんばれよ」
激励に来てくれたのか・・・？

「あと、お前さ途中で意識切り替えてるだろ？あれ良くないからあんまり使つなよ」

「え？」

「昔の御神苗を見てる感じがしたんだ。」

「まあがんばれよ、じゃあな」

ジャンが離れていくのを見てから雪は魔法で体中に受けた傷を治してた。

.....

「なあ御神苗、雪って前のお前より危険な感じがするな」

「どづいことだよ？」

「なんつーか、お前の場合は自分の命を重く思っていないかったが、あの雪って奴は存在自体が希薄な感じがするんだよ。よくわかんねーけどな」

「さてと飯でもいじつぜー」

.....

ひさしぶりにボコボコにされた事もあり、疲労度からその日は雪は夢を見ずに寝る事ができた。

いきなり戦場へ召還！

アーカム財団日本支社からの帰り道、電車に乗りながら自宅のある千葉まで戻っていた。

千葉駅に電車が入り、電車からホームに降りると、先ほどまで聞えていた人のざわめきや電車の走る音が突然消えた。

あたりを見渡すが、誰もいなくなったホームだけが存在していた。

電気も一切通っておらず、蛍光灯・電光ボードも全て消えている。

「なんだ？一体どうしたんだ？」

眼を閉じて再度開く　朱色の幾何学模様が浮いてくる。

アルファステイグマ
《複写眼》

と呼ばれる物だ。あらゆるものをグラフで数値で解析していく。魔術的特異点が関与してる事はなさそうだが、一步前に進もうとしたところで周囲の景色が消え去る。

「ばかな？異常を感じなかったのに・・・？」

すぐに耐魔法・防御構成を編む。さらに世界から膨大な精霊を身に纏う。

「《我は紡ぐ光輪の鏡》」

それと同時に、雪の周辺に無数の光の輪が展開されていく。

そのまま・・・

戦場の真ん中に落ちた。

「はえ？」

左を見ても右を見ても西洋甲冑をつけた騎士とわずか体を覆う程度の装飾に身に纏った人が戦っていた。

さすがにこのシュチエーションで異世界に飛ばされた事は初めてであつた為、混乱してきた。

雪の今の格好は9月という事もあり、黒のトレンカの白のロングスカート、女性用のフリルのついた白のYシャツの上から黒のストーを羽織つてる姿であつた。髪はバレッタにて纏められており後ろに腰まで流されている。

戦いという戦場からの常識からこんな格好で来る事態間違っているのだが・・・

数人の騎士がそのまま剣を振り上げ下ろしてきた。

そのまま、硬気功を展開し手を手刀の形にして内側から円を描くように頭上と通し外へ流した。

その軌跡により逸らされた騎士の剣が雪の右側に落下する。それに向けてそのまま外へ流した手刀に体重を落とし砕いた。

そして、そのまま、右手の拳を戻す反動で左手の拳を地面にうちつけ爆風を起しその間に空へ退避した。

しばらく戦の状態を見てると双方、引いていき、戦は終わったようだった。

「ふう、びつくりした。まさかあのタイミングで異世界召還なんて・・・」

精霊の状況を確認める、どうやらこの世界には精霊というものが存在していないようであった。

つまり連れてきた精霊を駆使して使っしかないわけなのだが・・・

先ほど攻撃を加えてきた騎士の一団の後を追ひ、適当な町か村で分かれるか・・・

「よし！」

そのまま、騎士達のあとを着かず離れずの距離をキープしてついていった。

登場人物編集（前書き）

随時更新する予定です

登場人物編集

鈴木 雪 すずき ゆき

数々の異世界召還において身につけた能力により対魔法戦に置いては無類の強さを誇る

身長 152 cm 3サイズは上から 91 59 90

体重 48 kg

黒眼に腰まである黒髪

主力は全てを解析する複写眼 アルファステイゲマ

概念物質から構成される武器 《至高剣》 《魔降剣》

短時間しか構成することはできないがモース硬度27の物質ですら断ち切ることが可能

元、男であり、ある事件を境に女性の体で固定されている。最近はその感覚を忘れないように常時《俺》という言葉で自分自身を現している。

ランツェル・スイエイデルタ

人口3万を有するスウエイデルタを治める王族にして王様

身長 190 cm

体重 78 kg

年齢 22才

フェンバリル

スイエイデルタ都市の10人いる戦士長の一人

身長182cm

体重108kg

年齢 37才

ユリアス

ランツェルが所有する召使

身長161cm スリーサイズ不明

体重 秘密 50kg前後?

年齢 19歳

都市スイエイデルタ

人口3万人の都市 現在侵攻してくる衛星都市と戦争中

鉱山をもっており、多くの銀を産出している。その経済力を背景に

強力な海軍と陸軍を誇る

現在は、石鹼・寝具を貿易に織り込んでいる。

オリンポス神殿？

騎士達のあとを着いていくと、ギリシャ神殿のような建築物が見えてきた。

何を隠そう。雪はパスポート貧乏だからもってないのだ！つまり外国に行った事がない！

「写真とかネットで見たことあるけど本物を見るとすごいなー」

そのまま騎士の集団は町の中に入っていった。

雪もそのまま町の中に入っていったが、服装的に浮いていた。

「うーん、でもここの人たちって歴史の授業で習ったギリシャの人たちの格好に似てるよね。」

ということとは、シルクロードから外国の人も来てるはず！だから大丈夫だね・・・

聞き耳を立てながら、雪は町を歩いていく。

どうやら言葉は通じるみたいで、周辺の町や村が次々と他の村を制圧化におき圧制を強いてると話をしていた。

しばらく歩いてると前から数人の男が歩いてきて、雪を見て立ち止まった。

「ん？」

その男を雪が見ると、突然

「先ほど、戦場にいた女だな？」

背の高い男が聞いてきた。

「いえ！人違いです！」

そこから離れようとしたがしつかりと捕まってしまい振りほどか無いといけないのだが・

「大人しくしろ、少し聞きたい事がある。」

雪もこの世界の構成がどうなっているのか分からない事と生活費どうしようと思ってたこともあり抵抗せずに捕まった。

肩に担がれて連行された先は白い大理石で築かれているオリンポスの神殿であり太さ2mの柱が何十本も規則的に並んでおり簡単に言うならばこの黄金戦士の神殿ゴルドセイント？という感じであった。

神殿の中を進んでいき、連れて行かれた箇所はまだ、アーチ工法が考案されていないのか太い柱を横にして天井を形成しておりその重

さを支える為にさらに太い柱で天井を支えるという見た目、うあーこれちよつとwという感じになっていた。

それを見ながら雪はあれ？アーチ工法ってたしか紀元前3500年少し前にはもう考案されていたって学校で習ったけど・・・と余計な事を考えていた。

いつの間にか下ろされていたのか一人の金髪・青眼の男がゆったりとした布に全身を包みながら肩肘をつきながら雪をしばらく観察してから話かけてきた。

「女、貴様は何者だ？」

「え？」

余計な事に考えが行っていた為突然聞かれた事に対して、考えが浮かばず思わずそんな発言が出てしまっていた。

「何者って……」

日本人ですけどって言ったたら、この無礼者がーって後ろで剣の柄に手をかけてる人が怒るかな？

「悪いですけど、人に物事をたずねるならば自分から名乗るべきじゃないんですか？」

ふ、言つてやったw死亡フラグ確立かな・・・

「き、き、き、貴様、女の分際でランツェルさまへ無礼な言い方を

「！」

すぐに剣を抜いて、打ち下ろしてくる。それを見ながら、手の平で受け止めてそのまま砕く。

「は？「なんと！」

さらに殴り掛かってくる男に大して腰を落とした拳を打ち込もうとしたが・・・

「フェンバリル！！もういい、やめろ」

先ほどのランツェルと言われた見た目が27歳くらいの金髪青眼の男が床に横にしていた体を起して立ち上がった。

身長は見た目フェンバリルって人が180cmとするとランツェルは190cmを超えていた。

「フェンバリル、貴様ではこの女には勝てん。私の名前はこのスウエィデルタを収めてるランツェル・スイエィデルタだ。一応この都市の王族をしている。」

「はあ、私の名前は雪といいます。」

「ふむ、貴族かと思ったがそうでもないのだな・・・だが我が国の鉄鋼で作った剣を素手で受け止め尚且つ砕くとは話に聞く、戦乙女か？」

「いえ、違います！人違いです。」

「ははははは、面白いな。お前は町の女達と違い自己の意思がはっきりしているな・・・しばらくここに逗留すればいい。戦場に現れるなどロクな事はしていないのだから?」

いえいえ、召還されたんですからw

「フェンバリル！ユリアスに雪を世話するように伝えておけ。」

「ようこそ、雪、我が国スウィイデルタへ」

なし崩し的に召使もついでにしまったけど一体こっつてどこなんだーと心の中で突っ込んでいた

オリンポス神殿？（後書き）

ご意見・ご要望がございましたらどうぞしつと書いてください

古代でもプライバシーとベットは大事です！

フエンバリルに部屋に案内された雪は寝台の上でゴロゴロできなかつた！

「あーうー。きちんとしたベットがなくてイタイよー、木で出来た寝台に藁を入れた袋が数個だけとかどうなの？」

これで王族の賓客対応だと・・・宿屋とかに泊るのが怖い・・・

「はあー。あんまり魔力使いたくないんだよね。」

部屋の中をきよるきよると見渡してから、両手を胸の前で合わせて錬金術の力の循環を確立させ、地面に手をつける。

つまり錬金だ！

ベットがせり出してくる。羽毛の入ったベット・・・と枕のイルカさんである。

錬金したベットとイルカさんの枕を木の寝台に置いてイルカを抱きながらゴロンと寝転がった。

「はふー。やっぱりベットって人類の至宝だよね・・・」

ベットの上でゴロゴロしていたが、雪が困ってた事があった。なんと部屋の入り口がデカイ&扉がない＝プライベートって何？それお

いいいの？状態なのである・・・

一人暮らしをエンジョイしてる雪としてはプライベートがない部屋
というのは落ち着かないのだ。

つまりそれは・・・

「扉を作れってことですね、わかります」

となるわけであって・・・

客間の入り口にいき錬金術で扉を精製。両開きの片方の扉、高さ3
m 幅1.5mの扉を作り上げた。
もちろん材質は木製に原子構成を変換して組んである。そのため見
た目ほど重くはないわけで・・・

「ぶっ」

一仕事したぜって感じで額の汗を拭っていた。

注 人の家や住居を勝手に改造したらいけません。

扉の開閉テストを行ってる際に、一人の美人さんがきた。

髪は金髪を少し黒を混ぜた感じ。身長は160cmくらい？体型は
ゆったりとした服を着ていて、体の線はまったく出ていない。

「初めまして、ユリアスと言います。ご主人様よりお世話を言い付かってきました。」

「あ、雪です。よろしくお願ひします」

雪がそう答えるのをユリアスは聞きながらも見慣れないドアと部屋の中のベットに眼は釘づけだった。

「雪さま、これは一体なんでしょうか？」

「？」

雪は一瞬、ユリアスは何を聞いているのかな？と思っていた。この時代に無い物に興味をもったのねと考えて、

「えっとね、これはドアって言ってこれを開閉すると中と外が区切られるんだよ！」

「で、向こうが寝るときに使う寝具だね！」

ユリアスさんはしばらく、ドアと寝台を触っていたけど、しばらく触ってフカフカのベットに触るとおーという感じで顔を輝かせていた。

しばらくユリアスさんと話をしていたけど、基本この世界の女性の立場というのはとっても低いものらしく、超絶亭主関白に近いものだった。

女の子は生まれて結婚適齢期になるまでは、両親に保護されて育つ

が適齢期になると持参金を持たせて、結婚させられるらしい。そのあと女性は、家庭に籠って子育て、家事をするらしい。一部の女性は財産は仕事についてるらしいけど、大半の女性は財産も全部旦那の物らしく持つ事は許されてないらしかった。

しかも、自分の妻が別の男と寝台に入ってたら問答無用で切り捨て御免もOKらしい。

なんて物騒な世界なんだーと聞きながら突っ込みを入れていた。

しばらく雪はイルカを抱いてゴロゴロこれからの事を考えていた。

この世界に来てからとても心が落ち着かないのだ。

その頃、広場ではユリアスよりランツェルは報告を受けていた。雪と言う者が部屋でいろいろと装飾をつけてると。

つい、ユリアスは気になり雪に貸した部屋へ向った。

雪の部屋の入る入り口には木の扉が仕付けられており、それを開くと寝台の上に大きな布が置いてあり、その上で雪と呼ばれた女がイルカを抱いてゴロゴロしていた。

それを見て、ランツェルはなんでここにイルカがいるんだ？しかもサイズが小さいな・・・と思っていた。

雪も扉から入ってきたランツェルを見ていた。それを見て、この時

代まだ東洋人というのはめったに見ることも無い為、白い肌に手入れの行き届いた黒髪を見てびっくりした。先ほどは油火の明かりだった事もあり、良く見れなかったのだった。

いまは雪が勝手に作った窓が嵌っておりそこから夕日が入り込んできており幻想的な光景を映し出していた。

すこし肌寒いこともあり、雪は錬金術で作り出した服を着ていた。白を基調とした膝丈まであるワンピースとドロワースで纏めていた。はっきり言ってこの時代にはありえない物であるが・

この時代の服から比べてると扇情的なのは間違いない。

そのまま、ランツェルは雪の座ってるベットのの上に腰を下ろした。腰を下ろした途端、その弾力性に驚いていた。

身長差もあり、雪がランツェルの顔を見ようとすると見上げる形になってしまふ為、ランツェルから見ると覗き込まれた形になってしまう。

その為、ランツェルからは雪の胸の谷間が見えてしまっていた。

「すみません、部屋に勝手に手を加えてしまいました。」

「いやいい、どのような物が興味があったからな。」

ランツェルはそう言つと部屋から出て言ってしまった。

あのベットど扉のアイデアは売れるな・・・と考えながら急いで賢易統括者と話をするため手配をしていた。それと同時に雪の近くに座ったときにほんのりと甘い香りが匂っていた。

実際はシャンプーとリンスの匂いであつたが・・・

ランツェルが部屋を出て行ってから勝手に部屋を改造してしまった事を不問にしてくれた事もあり、疲れが出てしまい気づいたら寝てしまっていた。

古代でもプライバシーとベツトは大事です！（後書き）

せつせと古代ギリシア人の資料集めています。

紀元前3000年くらいの資料でいいのがあつたらカキコください

）

加工貿易ですか？

雪がここの世界に召還されてからすでに一週間が経過していた。

「あゝもう。なんでこんなに退屈なんだろう」

そついいながら雪は羊の毛で作った絨毯の上でイルカを抱きながらゴロゴロしていた。

それを見ながらユリアスは雪さまは普段子供みたいよねーと心の中で思っていた。

雪が、都市スイエイデルタの王様にお世話になってる間に出したアイデアは、お布団と抱き枕と絨毯の作り方と石鹼の作り方をランツェルに教えていた。

石鹼は都市内にて有力者に配ったところ、とても反応がよく今は都市近くの鉱山で取れる良質な銀が外貨獲得の手段であったが、資源には常に限界があることもあり、石鹼や寝具を中心に今後貿易をしていこうという話になっていた。

材料は近くの村や町から安価で購入し製法は秘密とし加工貿易で稼いじゃおう！という作戦である。

どこまで、貿易のルートが開拓できているかは分からないけど、ランツェルの反応を見る限り中々だと思つ。

行政区間では、王ランツェル・行政担当官ヘルム・貿易担当官イルデルータ 軍務担当官スウエルが一同に集まっており、雪がアイデアを出した貿易に関して詰めをしていた。

行政区間にある広間でヘルムは見本として作った石鹼を手に取りながら

「ですが、この石鹼というのはすごいですな。オリーブからこんなのを作ってしまうとは」

「そうですね。この石鹼一個を売るだけで同じ重さの銀に近い外貨が入るとは」

「それに洗濯用の物と入浴用の物を分けて作る事により個数を作る事ができるとは・・・しばらくは釜戸と言う物を作る為に職人が総出になりますな」

スウィルがもう一個の見本の石鹼を見ながら言葉を挟んでいた。さらに

「寝具も閉しても取引都市の多くのポリスの有力者からも好感触を得ています。」

イルデルータはそういいながらも考えてから発言した。

「ランツェル様、今回のアイデアはランツェル様のアイデアだと聞いておりますが・・・」

「ああ、そうだ。それで一ヶ月で稼げる貿易の額はこれで間違っ

ないのか？」

「はい、いままでの外貨収入の10倍近いと思います。」

「そうか、わかった。それではしばらくはこれでいこう。銀の方の採掘はそのままにしばらくは石炭などを主力として出していこう」

自分の屋敷に戻った頃にはすでに日が落ちていた。日本時間だと午後8時くらいだろう

ランツェルはその足で雪がいる部屋に向っていった。

扉を開けて中に入ると、ユリアスと雪が絨毯の上で寝ている姿だった。

「まったく、床で寝るとは・・・」

ユリアスはその言葉で眼を覚ましたようで、そのままこの都市の特産品である銀食器をかたずける為に部屋から出ていった。

ランツェルはそのまま、寝ている雪を起きないように抱き抱えて寝台に寝かせた。

そのまま、ランツェルも雪が寝ているベットで横になってじーっと寝顔を見ていた。

「寝ていればかわいいのにな、普段起きてるときはいつも睨みつけてきてるから困ったもんだ」

そう言葉に出していた。

雪の姿はゴムで髪の毛を後ろで縛っており、腰まである髪を纏めていた。服装はピンクの薄いワンピースであった。

錬金術で作られた窓からは星の光が入ってきておりランツェルと雪を照らしていた。

その頃、雪はまた同じ夢を見ていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

なぜ？我々が死んで貴様がいきてるのだ？

何故お前が存在している？

雪が見ている夢の中ではたくさんの殺してきた屍が積み重なっており空から大地に至るまで赤黒い色で染め上げられていた。

ふと雪は自分の手に眼を移すと、手の平から血が湧き水のごとく湧き出してきた。

それが着ている服を赤く染め上げていく。

前を見ると、一人の若者の後ろ姿が見える。

その後ろ姿が少しづつ離れていくのを感じて・・・

「まって！私を置いていかないでー」

その瞬間、また意識が覚醒した。

ふと人の温もりを感じ、目をそつと開けるとランツェルがその腕の中に雪を抱きしめていた。

いつもは異性にそういう事されるのはあれだったけど、今だけは・・・温もりがほしい事もありそのまままた眠りに落ちていった。

それを見ながらランツェルは先ほど、寝ている雪がうわ言で置いていかないでと言ったのと閉じていた瞼から涙を零していたのを見て衝動に促されたまま、抱きしめていた。

何故かは知らないが、そうしないと行けない気がした。

雪が目をそつと開けて、自分を見てから微笑んでから再度眠りに落ちたのを見て、今日は側にいておいてやるか・・・と考えて頭をさすっていた。

その姿を月明りが照らしていた

朝の二つま(前書き)

古代ギリシアに来てから精神と考えかたが女性化してる雪。はたし
て・・・

朝の二じま

少しづつ日が昇ってきており、日の光が一人の少女のシルエットを写しだしていた。

その横では一人の長身の男性が一緒に寝ており、少女はその男性に身を預けるようにして寝ていた。

少女は、ここ北欧ではめつたにみない白い肌と黒い髪をしており掘りの浅い顔から年齢のわりにはおさなく見えていたが、すでにバランスのいい体をしてるだけあって男性と一緒に見てしまうと絵画から出てきたワンシーンの用ですらあった。

「うん。」

その少女もとい雪は、まだ朝早く眠い事と肌寒い事もあり男性ランツェルのわき腹にそのやわらかい髪をぐるぐると押し付けていた。

寝ていたランツェルはわき腹にかゆみを感じてしまい眼を覚ました。

隣を見るとまだ半分寝ているのか、雪はランツェルの右手を腕枕に使っておりわき腹でモゾモゾしていた。

それを見ながらランツェルは、まあいいかなと思いつつ雪と痴態を見ていた。

しばらくすると雪も段々と覚醒してきて、あれ？ランツェルなんで

ここにいるの？

覚醒しきつてない眼差しでランツェルを見た。

ランツェルもそれを見ておりお互いに近距離から見詰め合う形となつてしまつていた。

雪は、最近ずっと見ていた悪夢を見ずに済んだ事からすつきりとした気持ちであつたが、何故か知らないけど、ランツェルから離れたくなかつた・・

よく分からないけどしばらくはこのままでいたい・・

そんな気持ちを抱いていた。

ランツェルも服を着てるとはいえ、とても薄い布で遮られてる程度なので雪自身が体を押し付けてきてるだけあつてもてやわらかく花のいい匂いがしていた為、離れるのはもつたいたいなと思ひ、そのままにしておいた。

「ねー王様、なんでこの部屋にいるの？」

「ああ、貿易の件が纏まつたからその報告で来たんだが絨毯の上でお前が寝ていたからな。寝台に移したんだ。しばらく様子を見ていたら様子がおかしかったから昔、母上がしてくれたように抱きしめてやったんだが迷惑だつたらすまなかつたな」

それを聞きながらそうなんだ・・ランツェルもいい所あるね

ランツェルはそのまま雪の頭を撫でていた。
頭を撫でられた記憶はあるけど、もうずっと小さい頃の記憶だった
雪はそのまま気持ちよさそうにしていた。

「ううん、王様。ありがとうね。」

ひさしぶりに自然に笑えた表情でランツェルにお礼が言う事が出来
たが、ランツェルは顔をしかめて

「いい、あと今度からランツェルと呼び捨てでいいからな」

「うん、わかった。らんつえる？」

それを聞いたランツェルも何故か胸の中に暖かい物が広がるのを感じ
ていた。

「実はね、ずっとずっとね怖い夢を見てたんだけどぐっすり眠れな
かったの」

「だからね、ランツェルと一緒にいてくれて怖い夢見なかったから
ありがとうね」

「そうか、なら今日も夜寝る前に来てやるつか？」

「うん、でもエッチな事はダメだよ！」

「わかってる、そろそろ朝食の時間だからいくか・・・」

そう言ってランツェルは寝台から降りようとするが服を引っ張られ

る感覚を覚えて後ろを見ると

「あっ！」

雪もランツェルが離れた時、無意識的に裾を掴んでしまっていた。

すぐに裾を離して顔を真っ赤にしながら

「いつてらっしやい」

雪はランツェルの後ろ姿に言葉をかけた。

少しずつ離れていく後ろ姿に近視感を覚えて・・

「いや・・いかないで・・」

と無意識的に誰にも聞かれない声があった本人すら自覚しないまま
口から漏れていた。

口付けはとっても刺激的

ランツェルが部屋を出ていくのを雪は見てると、心に空洞が開いたような気がして傍らにあったイルカを手元に抱き寄せてぎゅーと抱きしめていた。

無意識的にそんな事をしている、自分に気づきながらも元男の意識がある雪としてはなんでこんなにあの男性に惹かれるか分からなかった。

しばらくすると、召使のユリアスが朝の朝食の準備をしてくれて、話しかけてくれたので、ベットから降りてテーブルの前へ座った。銀食器にのっているのは小麦で作った薄いパンと火を通してもらった卵、果物が載っておりそれを食べて終わってから

「ね、ユリアス。ランツェルって結婚とかしてるの？」

自然に聞いたはずだったが、ユリアスはランツェル王と呼び捨てにした事と婚姻に関して聞いてきた雪に対して多少驚いた表情をしていた。

「いえ。結婚はしてないです。」

「そうなの？」

雪は自分自身が信じられないほど、心の中で喜んでいたのを感じていた。

それからしばらく、ユリアスと話してからこれからの改善提案について話を進め始めた。

この世界で、聞いた限りでは衛生面がまだのようだったのでそれを一まとめにするために書類を作る事にした。

都市で共同の浴場とトイレの設置、下水道と上水道の設置、石鹸の普及の為の洗い場の設置などいろいろとあった。

夕食をとった後に、ユリアスが入れてくれた果実酒を飲んでからベットの所で枕を抱いてゴロゴロしているとランツェルが部屋に入ってきた。

「雪、待ったか？」

「ううん、待ってないよ！」

本当はずっと待っていたけど、顔を見た瞬間にそういつのはどうでもよくなった。そう思いながらも男の部分では女性がこんな風に言うのはこう言う気持ちなのかな？と思っていた。

それから、雪は寝ているベットのところを差してポンポンと、ここ来てーと意志表示をするとランツェルはそこに座って寝転がり、雪の肩に手を置いて寝転がせた。

ランツェルが右腕を広げてきてくれたところを見て、雪は枕？なの？?と思いつつもその腕の上に頭を乗せて、ランツェルの方へ顔を向けた。

向こうもこっちを見ていたようで腰に手を回ってきて抱き寄せると男性特有の匂いがしてきた。

不快という感じはせずにそのまま抱き寄せられたままにして目を細めて、そちらを見ていた。

ランツェルも目を細めて体を預けてきた雪に対して、頭を撫でながら口付けをしていた。

雪も、抵抗せずに啞内に入ってきた舌に自分の舌を絡めて舌で遊んでいた。

しばらくするとお互い唇を離れた際に引いた唾液の糸がベットの上に着いて染みを作っていたが、そのまま、ランツェルの胸に頭を預けるようにして、眠りについた。

その日も悪夢を見ることはなく、しばらくランツェルは雪の頭を撫でながら眠りについた。

キスって偉大だなんて思うわけですよ

ランツェルは雪が体を預けて寝たのを確認しながらその黒い髪を弄っていた。

小さい時分から、王家の者として育てられてきたランツェルは毒殺や女性を使った謀略などを近くで見してきた事もあり、女性に対して悲観的な考えをもっておりその結果、今年22歳になったが未だに婚姻をしていなかった。

古代国家においてこの年齢で王家の者が結婚していない事は稀であり、別の都市を治めている両親・臣下にも心配をさせていた。

ランツェルは、戦結果をフェンバリルから聞いた時、報告で一人の少女が単身で戦場に現れ素手で武器を破壊すぐに姿を消してしまった事を聞き興味を持っていた。

何故ならばこの時代の女性は、戦争に出るものは稀だからである。

見つかる可能性はとても低いと思われたが、フェンバリルにその少女を見つけたら神殿に連れてくるように遊び半分にああ、見つからないだろうなと思いい言っておいたがすぐに担がれて連れて来られたのを見たときは心の中で笑ってしまっていた。

女性が下ろされて、その顔を見たときは堀の浅い顔、低い身長、見知らぬ服装そして一番驚いたのは、夜のような漆黒の髪、油火の光に反射するように黒い髪が光っており空に瞬く星のようであった。

一瞬、言葉に詰まってしまい何者か聞いてしまっていた。

雪と言う少女が、フェンバリルを激怒させた事には驚いていたがそれ以上に100人の兵士を纏めるフェンバリルの剣を片手で砕いてしまった事に対してさらに雪と言う少女に興味を抱いた。

本来ならば、どこの間者が分からない女性を自分の住んでる神殿に部屋を与えるのは危険だったのだが危険という感情よりも興味が勝ってしまったっていた。

今日、提出された都市の衛生面改善・加工貿易という貿易方法・寝具・消耗品などこの少女は次々と知らない未知の技術を提供してくれている。

その都度驚かされてばかりで、政治・戦など女性が本来関与してこない所までこの少女は普通に踏み込んで発言してくる芯の強さをもっている。

だが、おととい貿易の話をしに来た時に消え去りそうな声で寝ながら呟いてた事、そして寝てるときに悪夢に怯えてる少女を見て、ラントセルは守ってあげたいといつの間にか心の中で感情が沸きあがっていた。

本来ならば、未婚の女性と寝る事は良くないのだが、部屋の中に入った時に雪が見せた照れながらもはにかんだ笑顔を見たときにそれらは全て吹き飛んでしまっていた。

それを考えてしまっているとすでに雪が作った窓からは外がすでに明るくなってきているのが見えた。

雪という少女が作ったこの窓という物は警備上問題があるのではな

識が覚醒していくのを感じた。

「うっん」

ランツェルに添い寝してもらっているからなのか、悪夢を見ずに寝れたのは久しぶりだった。

一応、男の意識はあるのだが、女性の体に意識が引かれているのかそんなに嫌な感じはしないし枕にしている腕を伝ってランツェルの温もりが伝わってくるみたい。

「よいしょ」

雪はベットの上で女子座りしてから

そっとベットの上に座り腕を支点にして覗き込むようにしてみるとランツェルの顔はすごい整っていて綺麗だった。

「うわー、ランツェルって絶対、男の敵だね！でもちゅっ」

髪を書き上げるようにして気がついたら唇に軽いキスをしてしまっていた。

「はっっ！」

思わず、その声を上げた自分に対して内心ドキドキだ。あれ、私なんでこんな事してるんだろ？きつとランツェルが悪いのよね！

雪は責任転換の称号を手に入れた。

しばらくするとユリアスが部屋に入ってきた。

「おはようございます、雪様」

「おはよう〜」

そう返されてユリアスは前を見るとベッドの上にいるランツェルと雪が見えた。

雪の顔を見ると睡眠が取れたためスッキリとしているのが見て、安堵した。ここ最近雪の焦燥ぶりには困っていたからであったが・・・

「ん？誰だ？」

「ランツェル！そんな言い方したらだめだよ！」

ランツェルがベッドから起き上がってユリアスを見てきた。

「おはようございます。ランツェル様、今から朝食を用意させますのでしばらくしましたらお部屋へ来られてください。」

「いや、いい。ここで食べていくからここに雪と私の分をもってきてくれ」

その命令にえ？と固まってしまった

「わかりました」

そういうとユリアスは部屋から出てしまっていた。

「ねーランツェル、今まで別々に食べてたのにいいの？」

「いいんだ。お前が気にすることはない」

「うん、わかった。」

「あっ」

ランツェルの手が自分の肩に回されたのを感じて見上げると顎を引かれて唇を塞がれしまっていた。入り込んできた舌を舐めてみたらざらざらした感じがしたけど何か不快ではなかったのでさらに続けていたら唾液が送られてきたのでそれも飲んでしまっていた。

「はっー」

ねーランツェルは私の事、どう思ってるの？って本心では聞きたかったけどなんかあれかなって聞かなかった・・・

しばらくすると、ユリアスが朝食を持ってきてくれたけど、上の空だったからなのか味を感じなかった・・・

刺客

雪がこの世界にきてからすでに半年が過ぎていた。異世界召還最長記録である。

その間に雪が出したアイデアにより都市は膨大な利益を得ており、経済を背景に海軍・陸軍など軍事面も強化されており、侵略行為を行わずにして回りの都市を併合していき、都市スイエデルタは人口17万人を要する一大都市に成長していた。

雪が提案した木をメインとした家作りも人気を呼んでいた。

でも当の本人はと言うと・・・

「ねーランツェル」

「なんだ？雪？」

「こここの町にきてから半年間ずっと軟禁状態なのはもう飽きたんだけど？」

「仕方ないだろ、大臣達を通してお前がアイデアだしてらって各都

市の要人にばれたんだから、お前を見せろってうるさいんだよ。」

「え、それってランツェルは私が獲られちゃうとか思ってたなり？」

「そうだとうれしいな」

「いや、お前が貿易の要のアイデア出してくれてるからな。お前がいないと経済が・・・っ」

「ぼとぼると泣き出した雪を見て言葉を止めてしまっ」

「ランツェルは私の事、なんとも思っていないの？利益だから？そういうので軟禁してたの？」

「い、いや。ち、違うんだ。だからなんというかそうだな・・・あーっ、そうだ！わかった。今度一緒に町でも見にいこう！そうだ、それがいい・・・な？」

「本当？」

「ああ、本当だ！だから泣くな、」

そのまま、雪をランツェルが抱き寄せた。

ランツェルを見上げて、

「うん、わかった！約束だよ」

「ああ、約束だ」

- - - - -

3日後、雪はとってもご機嫌だった。

毎日一緒に寝てくれて、悪夢を見なくなったのはいいけど、やっぱり石造りの重々しい感じの所にずっといるのは疲れてしまうのだ。それに男の意識はあるけど、なぜか知らないけど、ランツェルといると心がやすらいでついつい我がままをいつてしまうのだ。

はうー洋服どうしよー

と錬金術で作り出した等身大の鏡の前で悩んでいた。結局、洋服が決まったのは1時間くらいしてからだったけど・・

まだ3月という事もあり、肌寒いため白のロングスカートと白のフリルのついたYシャツその上から薄い紅色のストール、黒のロングブーツ、頭は銀色のバレッタで髪の毛を纏めてストレートで腰まで流していた。

もう、はつきり言ってギリシャ時代の服装から見たら俺は反逆する！という感じである。

という事もあり、一目で都市の住民に一目で豊穡と恵みの女神というのがばれてしまっていた。

どうやら一部では大地の豊穡などからあやかっ
て都市に恵みを与えた存在、デメテルと呼ばれているようだった。

そういう事もあり、ランツェルの腕に腕を絡ませて歩いていた雪に都市の人たちは目を向けていた。

異国の服装・見た目などがそれをさらに増長させている。

「？」

ふと雪は《アルファステイグマ複写眼》を起動させる。目に幾何学的な模様が浮かんでくる。

本当に小さい違和感だったが、嫌な感じがして回りを調べたのだった。

「え？ランツェルが狙われて・・・」

それと同時に5本に近い矢が同時に放たれる。

体内の気を昇華する暇がない為、2本は弾く事に成功するがもう3本は、ランツェルに向っていく。ランツェルはその3本を横にとび買わしたが、体勢が崩れてしまっていた。

時間差で別の刺客から放たれた矢が当たる瞬間、雪はランツェルに体当たりをするようにして矢から守った。

視界の端でランツェルが連れてきていた町の警備に刺客が連れて行かれるのを見て、安堵をした瞬間に背中に焼けるような痛みを感じながら意識を失った。

大国ミスノアの謀略

雪に矢が刺さった事は刺客達にも想定外であった。

この都市の急激な成長を恐れた隣国の大国ミスノアは雪を使って経済を立て直そうとしていたからだ。

そのために邪魔なこの国の王ランツェルを亡き者にしてから混乱を来たす神殿から雪を拉致する予定であったが、その大前提が崩れてしまっており、ミスノアの王アルドバルスからも雪を傷つけないように重々言われていた。

「ばかな？・・・身を挺して庇うなど・・・」

古代ギリシャにおいて、ほとんど家から出ない女性が男性を庇うことなど考える事が出来なかった事から刺客は全員放心してしまっていた。

これが知れば本国にいる自分の家族も殺されてしまうからだ

そして彼らが使っていた矢には毒が塗ってあります助からない

自分たちが町の警備に連れて行かれながらも目の先で倒れる黒髪の少女がこの国の王に抱き抱えられてるのがどこか違う世界から見えるような感じがしていた。

「くそ、なんで俺を庇った。なんで守れなかった・・・」

雪を抱えながら、ランツェルは警備と一緒に自分の神殿へ向っていた。

「エルアルム！すぐに国中の医者を集めろ」

神殿へついて、すぐに雪が寝ている部屋へ寝かせてから傷口を調べた。

「ばかな・・・」

既にランツェルの顔色は真っ青になっていた。

血はまだ流れていたが、それほどでもなかったが傷口が紫色に変色しており毒が矢に塗られていたのがわかったからだ。

よく見ると、雪がうつすらと眼を開けてるのが見えた。

「雪！ランツェルだ。今、医者を呼んである。もう少しの辛抱だ」

雪はその声を聞きながら、少しずつ体から力が抜けていくのを感じていた。

毒か・・・古典的・・・だね。

そのまま丹田を通して体中の細胞を活性化させ、毒に対する抗体を作り上げていく。しばらくすると抗体が出来たようで少しずつ体に力が戻ってくるのを感じながらも眠りについた。

その事を知らないランツェルは、再び眠りについた雪の手を握っていた。

1時間ほどすると医者が入ってきた。

「おそいぞ！何をしていたんだ！」

どこにも当てる事のない焦燥感から来た怒りを思わず入ってきた医者にぶつけてしまっていた。

すぐにその事に気がつき

「怒鳴ってしまったてすまなかつた」

「すまないが、診てくれ・・・」

そう言い、ランツェルは場所を医者に譲った。

医者は40歳の男だった。しばらく雪を見ていたようだが・・・離れてから

「私が出る事は何もありませんね」

「なんだと？ふざけるな！！貴様は医者だろうが、必要な物があつたらなんでも言え、なんでもすぐに揃える」

「いえ、揃えてもらつ物はないんです」

ま・・・さ・・・か助からないのか？

「あとのくらいもつんだ？」

「え？」

今度は医者の方がびっくりしていた。そして言い方が間違っていたのかと思いなおし

「ランツェル様、この少女が受けた毒はすでに効力を失ってるようです。」

そついいながら矢の傷跡だった場所を指差した。

矢が刺さった場所は、紫色だった箇所が消えており、傷口が塞がりかけていた。

「なんだと？もう傷跡がない？どういうことだ？」

「私もそれが知りたいですよ」

医者もそう返してきた。医者としても暗殺に使われる毒だとほぼ解毒方法が見つかる前に大抵は死んでしまうため、その場で対処できない場合助かる可能性は0に近い。まして暗殺にあつてから1時間が経過しているからだ。この部屋に入ってきたとき、王の姿を見た時にもう手遅れだと思っていたが、少女の傷口を見た途端に信じられない事が起きていた。毒で紫色に変色していた肌が元の色になつていき、傷口の凄まじい速さで再生していったからだ。

医者を25年しているがこんな事を見たのは初めてであり、やはり動転していたのだろう。中途半端な説明になつてしまい王に誤解さ

せてしまつて事について反省していた。

「そうか、すまなかつたな、気が動転していたようだ。文句を言つてしまつてすまなかつた。」

ランツェルが謝罪を言つと驚きながらも

「大切なモノを失いそうな時は仕方ないですよ」

そう言いながら医者が部屋から出ていった。

いつの間にか部屋にいたユリアスが

「ランツェル様大丈夫ですか？」

声をかけてきた。

「何のことだ？」

ユリアスは何か言いたそうにしていたが、視線を落としてきた。

ランツェルも下を見ると膝が震えており、そう自覚すると手の平も汗ばんでいる。

「もう、大丈夫だ。すまないが果樹酒をもつてきてくれないか？」

「はい、わかりました。」

そういうとユリアスは部屋から出ていった。

扉が閉まるのを確認すると、雪の手を握りながらこんな短時間に毒に対抗しさらに傷口が塞がるものなのか？もしかしたら本当に巷でいうように豊穣の神なのかもしれないと一瞬思ったが、すぐにそれはないと考えた。

・ 神が王と言えど一般人と結ばれる事などまずないからであつたが・

再度、雪の方を見ると雪の胸が上下に動くのを確認し、安堵のため息をつくと共に失いそうになった恐怖感を思い出していた。

しばらくすると、先ほど指示を出したエルアルムが部屋に入ってきた。

「ランツェル様、刺客を全員捕まえましたがいかがでしょうか？」

エルアルムを見て、ランツェルはこのような事をした刺客を生かしておく気はない

「どこの国の者が吐かせてから殺せ！」

「わかりました。」

そういうと、エルアルムは部屋から出ていった。

人物と世界観編集2

人物編集です

鈴木雪

数々の異世界召還において身につけた能力により対魔法戦に置いては無類の強さを誇る

身長152cm 3サイズは上から91 59 90 年齢18歳

体重48kg

黒眼に腰まである黒髪

主力は全てを解析する複写眼アルファステイグマ

概念物質から構成されてる武器 《至高剣》 《魔降剣》

短時間しか構成することはできないがモース硬度27の物質ですら断ち切ることが可能

時間を停止させてある物ですら破壊する魔法を扱う事もできる

元、男であり、ある事件を境に女性の体で固定されている。最近はその感覚を忘れないように常時《俺》という言葉で自分自身を現している。

8ヶ月前から起きた悪夢を見始めた事により急速に精神が女性化中。古代ギリシャにきてからすでに半年が経過中

いまのモットーは私は古代ギリシャの常識に反逆する！という感じで活動中

ランツェル・スイエイデルタ

人口17万を有するスウエイデルタを治める王族にして王様
身長190cm
体重78kg
年齢22才

最近は、雪が気になつてゐる模様？

フエンバリル

王都スイエイデルタの陸軍元帥

身長182cm

体重108kg

年齢37才

ユリアス

ランツエルが所有する召使

身長161cm スリーサイズ不明

体重 秘密 50kg前後？

年齢19歳

エルアルム

王都スイエイデルタの近衛兵警備隊長

身長181cm

体重75kg

年齢24歳

アルドバルス・ミスノア

大国ミスノアの王

身長172cm

体重98kg

年齢57歳

野心溢れた王であり、王族と貴族以外は人としては考えてはいない

が最近では自国の経済を立て直そうとしているが、スイエイデルタに邪魔をされた形になっており立て直す為に、雪を利用しようと拉致する為に人を派遣するが・・

ここからは世界編集です

王都スイエイデルタ

人口17万人の古代ギリシャの時代においては大都市。現在侵攻してくるミスノア王国の衛星都市と戦争中

鉱山をもっており、上質な銀と共に、雪が王の側にきてからは近代的な改革が成されており、アーチ工法による橋の建築。上下水道の設置、公共のトイレ、共同浴室などが設置されている。

木を利用とした家の建築など建物が増えてきており各国への輸出の増加に伴い人口が爆発的に増えてきている。

衛星都市を全部で7つもっている。

大国ミスノア

人口60万を越すエーゲ海最大の都市

侵略行為を行い、各都市に恐怖政治を敷いているため、経済が縮小し破綻気味。それを補う為に近隣諸国を侵略を繰り返すそれにより経済を支えている。

衛星都市・村・町の数100に及ぶ。

急成長を続けているスイエイデルタを危険視しており、その原動力になっている雪を利用し経済を立て直そうと画策中

奴隷制度を合法的に認めている。

罪と罰と悪夢

雪が倒れてから翌日

「ふあゝあ」

あくびをしながら目を覚ますと手を握られてる感覚がして左手を見ると、ランツェルが手を握りながら座ったまま寝ていた。

暖かい・・・ランツェルが握ってきてる手の平から伝わってくる温もりはとても気持ちよかった

んーランツェルって寝てても絵になるよね・・・

「ん？雪起きたのか？大丈夫だったか？」

「うん、大丈夫だよ。ランツェ・・・る？」

いきなり抱しめられた事に最後は疑問系になってしまい

「どうしたの？ランツェル手が震えてるよ？それに涙も出てるしどうかしたの？」

それを聞きながらも自分自身、こんなに雪と再び話が出来た事に動揺していた。そうか・・・俺は雪が好きなんだな、自分を心配そうに覗き込んでる雪を抱しめてから・・・

「なあ？雪、お前は俺が嫌いか？」

ランツェルは何を急に言ってるのかな？

「ううん、好きだよ」

「そうか、俺はお前を妃に迎えようと思っただが いいか？」

え、妃って奥さんって事だよな？でも元男んだけどいいのかな？
でも言ったら嫌われちゃうかな？

でも・・・嫌われるのは嫌！嫌われるって思っただけです！胸が
いたいもん・・・

それなら、いつそ・・・

「うん」

「そうか、わかった。」

そういえば、刺客の人ってどうなったのかな？でも聞かないほうが
いいのかな？

でも当事者なわけだし・・・

「ねえ？ランツェル。刺客の人はどうなったの？」

「ああ、今首謀者を吐かせてる所だ、首謀者が分かり次第、処理を
する。」

「処理って殺す事？」

「ああ、そうだ。」

その言葉を聴いた瞬間、目の前に悪夢が一瞬だけフラッシュバックして風景がぐらついた。

「大丈夫か？まだ寝てたほうがいい」

「ねえ？ランツェルお願いがあるんだけど、その刺客の人たちに会わせてほしいの」

「ダメだ！それは許可できない」

「お願い、そんなに簡単に人を殺したらダメだよ！だってその人たちも家族がいて仕方なくやったかもしれないじゃないの？だから一回話しをしてみたいの。お願いだから」

雪自身も何を偽善を言ってるんだろうと思ってる。今まで多くの命を奪ってきたこの手がこの口が今更何を言ってるのかと・・

それと同時にもし子供を生んだらこの血にまみれた手で抱しめられるの？

今考えると何であんなに多くの人の命を奪ってきてこんなに平気なのか・・？

すでに答えは出ている・・・全て・・・

その考え込んでる雪を見ながらしぶしぶランツェルは

「わかった。明日会えるように手配しておこう。それまでは今日一日ゆっくり休んでるんだぞ？」

「うん、わかった・・・」

「ねえ？ランツェル。私って幸せになる権利あるのかな？」

そう言った雪を見ながら、ランツェルはこの少女が何をそんなに抱えているのか想像もつかなかったが少しでも負担を軽減できるように寝るまで抱しめていた。

婚姻

翌日、目覚めるとランツェルに両手で抱かれていた。

嫌な感じはせずに起きるまでそのまま、その温もりに身を任せていた。

「おはよう、ランツェル」

「ああ、おはよう」

そう挨拶をすると軽いキスを唇に落とされた。

あっ！もう少ししてほしかったのに！

「ね、これから仕事なの？」

「仕事も含めて婚礼の準備の手配だな、しばらく忙しくなると思う。」

「そんなに心配そうに見なくもいいのに・・・
心配性だな！もう」

「うん、わかった」

そのままランツェルは部屋から出ていってしまい、入れ替わりでユリアスが入ってきた。

「雪様、おはようございます」

「ユリアスも朝から元気そうね」

「はい、それでは朝食の準備をしますね」

「よろしくね」

言葉を交わすとユリアスは朝食の準備の為に部屋から退出した。

手元にあったイルカのぬいぐるみを引き寄せて胸元に抱き寄せて考えていた。

なんかこの世界に来てから、女である自分にうつん。違う、うまく言えないけど女でいる事に違和感を感じなくなってる？
それに、来た当初感じてた焦燥感がすっかり消えてる？

なんでかな・・・

.....

ランツェルの邸宅は総面積が3000坪以上ある。その一室で各部門の一新された職名 大臣達が顔を揃えていた。

「どうやら今回の刺客は大国ミスノアからだったようです。王より勅命で王を暗殺し雪殿を拉致する予定だったそうですが、今回その拉致する予定の本人を殺した事によるショックから簡単に情報を聞きだせました。」

「そうか、わかった。刺客に関しては雪が直に話をしたいと言っていたのでしばらくは殺すな」

「なんですと？ 女人が政治に関るなど・・・」

大臣達が騒ぐ

「その女人のおかげで貿易が成功しているのだ。男だけが何でも対処していくというのは古いのかもしれないぞ？」

ランツェルはそう言いながら大臣達の顔を見渡す。

「あとناً・・・雪と婚姻を結んだ。近く式を行いたいと思うので各部署へ通達を頼む。」

おお・・・

「やっと王もご結婚を・・・」

何人も大臣がその言葉に同意した。

「ああ、派手に頼むぞ」

「それではこれから国政を決めて行きたいと思う。」

そのまましばらく話し合いが続いていた。

暗殺者をスカウトしちゃうよ！

翌日も雪はベットの上でイルカを抱きながらゴロゴロしていた。本当にダメダメな子である。

「はふ〜。ねーユリアス」

「なんですか？雪様。」

「呼んだだけ〜」

「……（怒）」

「怒るとかわいい顔が台無しだよー」

ユリアスの顔を見てるとまったくもーって感じで

「別にいいんです。雪様こそ結婚式の服のサイズとか儀礼とか学ばなくていいんですか？」

「うん。ばっちぐーだよ。」

「なんですか？そのばっちぐーって？」

「簡単に言つとね、パーペキって事だよ〜」

「はあ、なんか最近雪様の言ってる言葉をスルーする癖がついてきましたよ」

「えー。そんな事言われるガラスのハートブレイクだよ。」

そんな話をしていると・・・

トントン・・・という音と共に扉が開いて一人の兵士が入ってきた。その兵士とユリアスが話してる。

「雪様、兵士より例の暗殺者との会話の許可が取れたと連絡がきました。どうしますか？」

やっときたー。もう待ちくたびれたよ

「ラジャ！」

と軍隊式の敬礼をしてから

「それじゃいつてくるねー」

そついいながらも部屋から雪は出ていった。

部屋から出てしばらく歩くと地下へ降りる階段が見えてきてそこを降りていくと木製の扉が見えてくる。

扉を音を立てながら開けて中に入ると複数の人が目に映った。

兵士二人と椅子に縛り付けられてる暗殺者が1人 縄でぐるぐる巻きにされてる人が5人いた。

雪の姿を見ると兵士の一人がこつちを見てから挨拶してきてくれた。

「雪様、お待ちしてました。」

「ごめんね、待たせちゃて」

たぶん、こういう風に言うのって王族になる身としてはよく無いとおもうけど、たぶん一生抜けないんだろうね

兵士の方を見ると困惑してるようだったけどとりあえず聞かれるとまずいし席を外してもらわないとね

「えっとお願いがあるんだけど、少し部屋から出ていてもらえる？」

少し困惑してたみたい。

「わかりました」

部屋から出て行ったのを確認してから聞き耳を立てられると困るのでサイレントの魔法を使っておいた

暗殺者の方を見るとやっぱり困惑してるみたい。そうだよね、暗殺されかけた人がここにくるんだもん

「デメテルの再来と言われた貴女が、こんなところにくるとは・・・

」

正直、殺されかけた者に会いにくる奴の気がしれない。それに良く見るとこの暗闇の中でも油火に照らされて光る黒髪と黒眼がとても印象的だ。異国の服と合わさって幻想的にすら感じる。

「自分を暗殺しかけた相手に何か用か？」

「つい、そんな話しかたをしてしまった。」

「デメテルの再来って言われてもねー一般人なんだけど・・・でも」

「うん、中々な用があるんだよね」

「中々？言い回しがよく分からないな？どついう真意があるんだ？」

「貴方達って、ミスノアからの暗殺者なのよね？」

「ああ、何度も言ってる。それがどうかしたのか？」

「貴方達って家族がミスノアにいるの？」

「成るほどな、暗殺者だけを殺すに飽き足らずにその家族まで復讐のターゲットか。王族らしい考え方だな・・・」

「それを聞いて何をしたいんだ？身内をいたぶり殺すつもりなのか？」

「ううん、一つ聞きたいんだけど、暗殺者って暗殺失敗した場合はどうなるの？」

「なんだコイツ馬鹿なのか？そんな常識すら知らないとは仕方ない、黙ってる内容じゃないし教えてやるか。」

「相手に捕まった場合は、その相手に殺される。失敗して依頼主に」

たどり着く証拠が残ってる場合は依頼主に殺される。見せしめに家族を殺される事もある。そんな事も知らないのか？」

「うん！だって暗殺してきた人って今まで問答無用で私、殺してたし」

一瞬絶句した。どういう事だ？こんな少女が人を殺した事があるか？たしかにあの暗殺現場での動き方はなかなかの物だったがそれでも、それなりの動きだったそれなのに殺してただと？

「……」

「もうそんなに怖い顔しないでよ」

しばらく考えていたのを睨まれてると勘違いしたらしい

「実はね、今貿易を重視にこれから展開しようとしてるんだけど・

」

「私に雇われる気ない？」

「はあ？」

思わずそんな言葉が口から出てしまった。暗殺しに来た人間を雇う奴がどこにいるんだ？

「驚く事も無理ないと思うけど、実はね貿易をしていく上で各国の都市とか町とか村の特産とか価格とか事前に知っておくとどれが利益でるかかって大体予想がつくのよね」

「それで、その調査の為に貴方達を雇おうと思ってるの。だってこの世界って物騒でしょ？暗殺できるくらいの実力があるなら単独で行動して効率よく情報集められるじゃない？」

この女、本気で俺達を雇って情報を集める為だけに使っつもりなのか？寝首を掛かれる事を恐れてないのか？

「もちろん、王国に残してきた家族や親戚に関してもお仕事はこちらで斡旋するし、国から脱出する際にも手伝うから大丈夫よ！」

なるほどなそれで家族がいるかどうか聞いてきたのか。それにしても国からの脱出を手伝うって軍でも動かすつもりなのか？そんな事をすれば戦争になるぞ？そんな事をここの国の王が許すわけない。だが、本当なら破格の条件だ

「本気なのか？」

「うん、それに人を殺して血に塗れた手で家に帰ってから子供を抱くのって嫌でしょ？」

たしかにな・・・この女が言ってる事はわかるが、それでも今まで任務の為に多くの人間を殺してきた。それ以外に俺達には仕事はなかった。だからこそ諦めて暗殺業をしていたが・・・

「好きな奴はいないが・・・俺達はすでに何十人も人を殺してるのだぞ？そんな奴らをお前は平気に雇えるのか？」

俺がそう言つと、その女が神妙な顔つきをしてきた。思わず、感情が読み取れない瞳を見てしまい見とれしまっていた。

「うん、ちょっと気を引き締めてね」

女がそう言った瞬間、膨大な殺気を感じた。なんだ……これは……これは人間が出せるモノなのか？ば……化け物……

「分かってくれた？だから大丈夫だよ」

すぐに殺気が抑えられたが俺と部下が全員、激しい疲労に襲われていた。馬鹿な……戦場においてもこれほどのプレッシャーを感じたことはない……ぞ

どれだけ人を殺せばこれだけの殺気が出せるんだ？

一つだけ分かる。目の前の女は化け物だ。こいつが俺達を殺さないのは恐らく使えるからだろう。

利害が一致してる内は信用できる。だからこそこの女の提案を受け入れようと思った。

「ああ、わかった。」

「まだ、貴方達の事は雇い主にはばれてないみたいだから、しばらく体を休めてから王国に向いましょう。」

「何？自ら着いてくるというのか？」

「うん、私一人の本当は良いんだけど、貴方達がいたほうがご家族の人安心して来てくれるしね」

当然のごとく、一人で着いてくると言っていたが、この国の王がそんな事を許すわけは無いと思うのだが……あの女ならなんとかしそ
うだな……

「それじゃ体を休めてね」

と言っ言葉を聞きながら女が出ていった扉を見つめていた。

「まったく・・・信じられないな」

「ああ、だが本当の話ならば暗殺業から足を洗って真つ当な職につけるな」

「でも、俺達とあんな少女一人で王国に襲撃にあつたら何とかなるのか？」

「たぶん問題ないんじゃないのか？感だが相当強いぞ。」

俺は部下達の話に対して半信半疑だったが答えた。

「そんななのか？」

「ああ、今は少しでもあの少女の負担にならないように体を休める事にしよう」

とりあえず、あの女の負担にならないように今は万全の状態にするしかないな

古代ギリシヤなのにすでに世界地図を作ってます！

暗殺者達と話しをした後、雪はランツェルにそのまま会いに行き、雇用の件と家族を迎えに行く為、雪が外出できるようにしてもらおうと掛け合ってきたのだが・

部屋に戻ってきたきり、絨毯の上で等身大の熊の縫いぐるみを座らせて抱きつきながら唸っていた。

「うん」

「どうかしたんですか？雪様」

ユリアスが部屋内に干してあった雪の服をたたみながら話してきた。

「どうかしたんだよね。実はね外出許可をランツェルに取りにいたら、ダメだーって拒否られたの。困ったもんだよ」

雇用の件はOKをもらったのだが、お出かけの件は即効却下されてしまったのだ。

「それは当然ですねー」

「ええ、ランツェル支持派だったの？ユリアスの裏切りものー」

「別に裏切ってませんし、怪我したばかりで婚礼を控えてる身であ

りながら不用意に外出するのは如何なものかと思えますよ？」

「むー」

当然の事過ぎて言い返せない・・・

「いつそここの壁ぶち壊していこつかな・・・」

「それは、出来ても出来なくてもやらなくてください」

「あー」

「なんかユリアスの私に対する言動が最近冷たいよ」

そういいながら絨毯の上でゴロゴロしていた。

.....

それから2時間後、秘密裏に気配を隠して扉をピッキングして中に入り、暗殺者達と雪は密会していた。

「それはマジですか？」

「うん、大マジだよ」

「でも、王様とかに許可取ってないんですよ？流石にそのまま表に行くのはまずいんじゃないんですか？」

「大丈夫！いい作戦があるんだよ」

「どんな作戦なんですか？」

「うん、聞いておどろくな！終わりよければ全て良し作戦だよ！」

「……」

暗殺者達の私を見る目が冷たい・

「ちょっとW何、期待して損しちゃたよみたいな目は！」

「ほらそこ、痛い子を見るような目でみない！」

「作戦は、明日、昼食が終わった後、私がこっちに来るから、そこから変装をして王都を出るといふナイスアイデアだよ！」

「はあ」

「うわーすごい肩落としてるんだけど、どういふことなの？」

「溜息つくくと幸せが逃げるんだよ！もう〜」

「！」
「という事で明日のお昼から作戦開始だから各々休んで置くように」

「それから明日の御昼からは私の事は軍曹殿と呼ぶように！わかった？」

「はい」

「もう少し気合入れるようにね！」

- - - - -

その日の夜、ランツェルは雪の部屋まで来てから中に入ったが、雪が何か熱心に見てる。

「………雪？何をしてるんだ？」

「う、うん？何もしてないよ？」

あやしい……

「貿易のことに關して周辺国の地図を見ていたの。」

そついいながら、雪が今日書いたのか地図を見せて来てくれた。それを見たが、今まで見たことの無い大陸などがたくさん書いてあり絶句してしまつたが、王としての威厳があるし……冷静に……

「雪が書いた地図は随分精巧に書いてあるのだな……」

こんな地図は見たことがない。ここまで精巧に書かれてる地図が世界^{ロバ}に出回れば一気に世界が変わる。それは理解できた。それと共にこんな地図を描いてしまふとは、やはり雪は……天使かナニカか？

と一瞬思ってしまった。

とりあえず、自国の場所くらいは確認しておくか・・・そう思い

「私達の国はどこにあるのだ？」

「このへん！（旧アテナのある位置）」

雪が細い指先で場所を指してきてくれた。本当に半島の先にあり、雪が書いてくれた地図から見たら小麦粉の麦くらいであった。

「そうか、だが雪が書いた地図だと私達の国はとても小さいのだな？」

「うん、だつて世界地図だもん！」

「世界地図？」

なんだそれは？世界はファラオが治めてるエジプトまでではなかったのか？

「うん、私達が住んでるところはね、ヨーロッパ地方でこつちがアジア、ファラオとかがいる所がねアフリカでここから地中海を通過して大西洋を越えてある大陸が北アメリカ大陸と南アメリカ大陸なんだよ。それで南大陸から太平洋を通過していくとオーストラリアがあつてこの近くにあるのがすごい寒い南極大陸なの！」

最早何を言ってるか理解の範疇外だった・・・この地図が本当に世界を現しているならば我々はなんと小さい所で戦争をしているのだ・・・

「そ、そうなのか？」

「うん、世界は広いのだな。」

「うん、とつても広いんだよ、だからこんな小さいところで戦ってるのはダメなの！もっと大きな視野をもたないとね！」

雪にも言われてしまった。たしかにこれだけ広ければ戦争をして領地を拡大する必要はないだろう。戦争をする国力を外の発展に使えばどれだけ栄えられるのか・・・

そこまで考えてると雪が眠そうにしていた。とりあえずベットで横になるように言うか

「今日は、このくらいにしてそろそろ寝るか？」

「うん！」

雪を私は抱え上げてベットで下ろしたがその時に髪の毛から花の香りが出てきたがなんとか自制した。結婚前に抱くのは抵抗があったからだが・・・

「それじゃランツェル今日もお休みなさい」

「ああ、お休み」

あまりにもアツサリ眠られるとこっちも困るのだが・・・

そのまま雪を抱しめて私は寝た。

古代ギリシャには娯楽が無いと思うので漫画家になります

「いろいろと考えたわけなのですが、私はいろいろな移動魔法を使える事を忘れていたのですよ。そんな事もあり、ちゃっっちゃっと暗殺者の思念からご家族の気を探し当てて、魔法で合流して戻ってきたわけです。」

「それで、雪様は誰と話してるのですか？」

「えっとー神様？」

「相変わらず、頭沸いてますね」

「ひどいよーユリアス、最近突っ込みがとってもひどいよー！」

雪はそう言いながら、机の上で必死にカキカキしてた。

「で、雪様は戻ってきてから何をしてるのですか？」

「うん、私は考えたんだよね！」

「へー何を考えたんですか？」

「うん実はね、ここの都市って娯楽が少ないじゃない？」

「そういえば、そうですねー」

「うん、それでね。私、漫画家になってそれを出版しようと思うの

よね！」

じゃーんと雪は書いた原稿200枚をユリアスに渡した。そしてユリアスもそれを見ながらぺらぺらと紙をめくっていくが・

「つまらないですね、ええ。本当につまらないです。」

「ひどい言い直しもさらにひどいよ。」

「こんなんじゃない、週刊誌だと門前払いですね。」

さらにユリアスは追撃した。もはや週刊誌ってなんで知ってるの？というの神のみぞ知るといふものである。

「うーん、やっぱりこう、湧き上がるあれが足りないんだよね！」

「雪様、それで婚礼の儀式的練習はきちんとしてるんですか？」

「うん」

「そうですか、婚礼の服を調整する方と指導をする方が泣きながらもうムリだーとドアの所で喚いてるのは気のせいなんですか？」

「うん、幻覚だよ」

「くだらない漫画書いてる暇があったら恥を書かないように練習してきてください、主人の恥は召使の恥でもあるのですよ？」

「本当に使えないご主人様なこと」

「ぼそつと、雪に聞えないように言った。」

「ちょっとユリアス、もろに聞えてるといつか擬音ですら言葉に出してるとかどういふ事なの？」

雪が反論するが、ユリアスが指をパチンと鳴らすと衣装担当と式担当の人に両脇から抱え上げられて連れて行かれる。

「ちよつw主人を売り渡す召使ってどうなのー？やめてーはなしてー」

そう言う声が聞えながらも雪の声が遠ざかって言った。

「はあまつたく、相変わらずですよね。雪様は・・・」

雪の部屋を見ると、木で作られたダブルベッドがあり、その上には羽毛のベットに掛け布団 イルカの抱き枕2個に熊のぬいぐるみ等身大が置いてある。

さらに部屋の中にはダンスや等身大の姿見。デスクチェア、漫画を描くための材料一式 中央にコタツが設置されている。壁には窓ガラスが嵌っており、すでにどう考えてもギリシャ時代じゃないだろ？つていう部屋である。

「今日もないうちに雪様の下着の洗濯と部屋の掃除をしないといけないですね。」

といい立ち上がり作業を開始した。

心漂世界

衣装合わせと儀礼の練習を夜までみつちりと仕込まれて、雪はベツトの上で撃沈していた。

「あー疲れたよー」

「普段からきちんやってないからです。自業自得ですね。」

「ユリアスがいじめるよー」

とブーツと頬を雪は膨らませながら布団の上でゴロゴロしていた。

「さて、今日もそろそろランツェル様が来る時間ですので私もお暇しますね」

「はい。また、明日ねー」

雪は部屋から出ていくユリアスにそう声をかけ手を振った。

「でも、なんか今日は眠い、なんでか・・・な・・・」

眩いてる途中ですでに寝てしまっていた。

・・・

・
・

ここは・・・夢の中？

周りには、以前見た風景が浮かび上がっている。

レリーフ・神殿・祭壇・そして刃渡り20cmほどの氷のように透き通った研ぎ澄まされた刀。

神殿の柱の間から外が覗けるようになっており、隙間から見える風景は金色の絨毯のような菜の花を敷き詰めた風景が見渡す限り見て取れる。

そして目の前には腰まで届く銀色の髪と紫と緑のオッドアイをもつ美しい20代の女性が立ってこちらを見ている。

身長の高さは雪と同じくらいであり、雪の髪と瞳の色を変えると鏡を見るような印象を受ける。

「やっと会えたわね。」

だれ？

「私の名前は、クレミア」

クレミア？

「そう、光ある者・全ての根源と言う意味よ」

それで何のよう？

「貴方の意識と精神が世界に飲み込まれようとしてるからこそ、自我意識が崩壊しかけてるからやっとな私が出て来れたの。」

「でもこれは、私とハースアールの思い描いた物とは違うの、貴方が精神的に弱くなつたからこそ、もつとも幸福だった時代の記憶に精神と肉体が引きづられてきたのでしょね。」

「ここは、貴方の記憶が作り出した世界なの。だからこそ、この世界に引き込まれる際に何も感じる事はできなかったでしょ？」

「このまま、この世界に居れば貴方の自我は世界に食い尽くされてしまう。」

自我が食い尽くされる？存在自体が？どうすれば？

「大丈夫、もう気づいてるのでしょ？如何に自分が表面上取り繕つたとしても大勢の人を殺してきた現実と言うのは変わらないの。それに向き合い受け止めなさい。貴方が今存在してる世界は貴方の弱い心が神具を介して作り上げてる世界なの。向かい合い受け止めれば自然とこの世界を構成してる物は貴方の記憶に回帰するわ」

神具？

「ええ、アウラウストウルの楔と言う世界を形作る概念を縛りつけ

それにより世界を再構成し止めておく力を持つ物なの」

そんなの持ってないよ、それにそれを使えばこの世界を維持できるんじゃない？

「いいえ、アウラウストウルの楔を使っても数千年前にあった事までは現実として作り出す事はできないわ。」

え？だって矛盾してるじゃないの！尖閣諸島の際に時間を巻き戻したならばそれと同じ事をすればいいだけじゃないの？

「それほどの力が貴方にあるのかしら？数千年の時を巻き戻すのにどれだけの負荷が世界にかかるか分かる？貴方は数ヶ月巻き戻すだけで精神衰弱を受けるほどの悪夢と言っペナルティを負ってるのよ？代価が支払えないならば発動すらないわ。」

「それにね、全てはもう過ぎ去った過去であり記憶の集合体にしか過ぎないの。ここは貴方の記憶が作り出した世界であり、本当の世界ではないの。それに、貴方が起した行動により、本来あった記述とはは異なっていて世界は、もうすぐ綻びが出始めるわ。」

でも、ランツェルと結婚とかあるんだよ！それにユリアスとだってまだ友達になっただばかりだし、やっと悪夢も見なくなったんだよ！

「悪夢は貴方が今まで犯してきた無意識的に溜めてきた罪の意識が見せてる物なの。」

「それに、もうこの世界の時間はもう長くないわ。一度過ぎた時間はもう戻らないし、それにランツェルとは貴方は一度会っているわ。」

「会ってる？どこで？」

「それは、私の口から言う事ではないわ。いつまでも自分の作り出した世界で逃げ続ける事が貴方の本当に目指す男の中の男がする事なのかしら？男だと自負するなら自分のやった事から目を背けずにしっかりと受け止めなさい。」

嫌！嫌よ！なんでそんな事を言うの？男の中の男？わかんないよ！こんな異常な状態にずっと巻き込まれて、私の意志を無視して巻き込んで結果、最後には寝るたびに同じ悪夢ばかり！

あんな怖い悪夢を毎日見るくらいなら、この世界にずっといたい！だってこの世界はやさしいもん！私にやさしいんだよ！戦いだつてないし、人を殺す事だつてないし。今までで一番いい世界なんだよ！！

その世界に甘えて何が悪いの？記憶の中の世界でもいいじゃないの、もう元の世界に戻るの嫌なの！

「貴方がどんなに否定しても、もうすぐ終わりはくるのよ？」

終わりがくる？何を言ってるの？私にとって終わりなんてもうとっくの昔に来てたのに・・・

一番最初に召還されてから複写眼アルファステイグマが使えると思ったと喜んだ私は学校の帰りに家に戻った時、その家には私という子供は存在していなかった！

表札を見ても両親の名前と妹の名前しか存在していなかった。

そして、戸籍謄本を見ても私という名前は存在していなかった。私の戸籍謄本を見たときは両親の欄は空白。親戚も誰もいない。そんな異常な書類を私に出してきてる職員達もおかしいとは思っていなかった。

私が住んでいたとされている家は安いアパートだった。

契約者の世帯主の保護者欄も空白だった。

力を手に入れた途端に世界から私は拒絶された。世界から拒絶された孤独が分かる人がいるの？

今まで、一緒に暮らしてきた血の繋がった両親と妹が他人になった気持ちができる？一回会ったときに他人を見たような目で見られた人の気持ちがわかるの？

世界に拒絶されて、私の居る場所は存在していなかった。

改変は学校に居たときにされたかは分からないけど、高校だけは異常がなかった。でも入学書類の両親の欄は空白だった。

でも、私が世界と接点があったのは学校の友達だけだった。

だから、アルバイトをして学校に通った！だって、あの世界で私に残ってる場所は学校だけだったから

それでも異世界への召還は繰り返されてた。そんな非日常を普通の精神でやっていけると思う？

でも死にたくなかった。だから、異世界に召還された時は生き抜く為になんでもした！

でも、本当は、人や生き物を殺したく無かった。でも仕方ないじゃない！そうしないと死ぬんだから、そのために私自身の心を守る為に意識に切り離して戦った！それでも、それでもどんなにがんばっても仲間を作っても異物という事で最後には世界から拒絶されて元に戻されてた！！

現実の世界に私が私で居るとい証は安いアパートと学校しかなか

った！それでも戻されてたんだよ！

それで、突然こんな訳の分からない状態に巻き込まれて、もううんざりなの！！だって、私だって元は一般の普通の日本人だったのになんでこんな事になってるのよ！

本当はね、普通に暮らしたかった。両親に守られて、妹とたわいもない事で喧嘩したり笑ったりしたかった！

誰かにここに居ていいんだよって言うて欲しかった！それに、こんな力もいらなかった。

この世界だけなの！私を受け入れてくれて守ってくれるのはここだけなの！だから邪魔しないでよ！

もう、嫌なの！人を殺す事も、力を振るう事も嫌なの！だからもう、そっとしておいてよ！

「本当にごめんなさいね、貴方達には本当に申し訳なく思ってるわ。世界の存続の為に魂の永続的犠牲を強いてしまったのは。でもこれしか方法がなかったの。本当にごめんなさいね」

「でも一つだけ。貴方が居る世界はそのうち消えるわ。その際に貴方が自分自身の心に区切りをつけるのかそのまま世界に飲まれて消えるのかは貴方次第だわ。」

そう言うと女性が消えて行き、それと同時に意識が浮上するのを雪は感じとった。

願いと思いに捧ぐ

眼を覚ますと私を覗き込むように心配した瞳でこちらを見てたランツェルと視線が合った。

「大丈夫か？雪」

「うん・・・」

「そうか、さっきな私の前にハースアールと言う男が現れてこの世界の事を教えてくれた。」

「え？」

そんな・・・なんでそんな事を・・・

「この世界は雪が、無意識的に過去の記憶から作り出した世界だと聞いた。そしてその原因が、雪の心が弱くなつた為の逃げ場所の為だという事も」

「そんな事ないよ！だって私はこんなに元気だよ。」

「雪。私はな、前にお前が寝て苦しんでる時、何を見ていたかまでは知らない。だけど私が一緒に寝てる間だけは悪夢を見なかっただろっ？」

「う、うん」

「それで、私は前々から思っていたんだ・・・」

「たしかに雪の伝えてくれる技術・経済理論・世界地図など素晴らしいものばかりだ。いや、素晴らしいと言ってしまうと間違いはないだろう。この部屋の調度品を見ても分かると思うが、明らかにこの世界では到底考えられない物ばかりだ」

「私は近い将来、このような事になるかも知れないと分かっていたのかもしれない」

「ハースアールと言うものが言うには、この世界は雪の記憶から作られてる以上、いつかは消えるのだろうか？その時、雪はどうするのだ？」

「私もそのまま消えるよ！」

ランツェルは、まったく何言ってるんだという感情の籠った眼差しで雪の眼を見つめてきた。

「雪、お前と俺は現実の世界で、俺の生まれ変わりと会っているのだから？ならばそいつになんとかしてもらえ！俺は何度生まれ変わろうとお前の味方だ。たとえ、神が敵に廻ろうとお前を守って見せる。本当はお前を俺自身の手で守りたかったがな。」

「でも、私には何も返せる物がないよ・・・」

ランツェルは雪の頭に手を載せながら

「好きな女がいるなら見返りを求めないのが男ってもんだ。大丈夫だ、俺を信用しろ。それから一言言っておくがお前がいていいのは俺の側だけだ。」

「それとな、過ぎた事をいつまでもくよくよするな、過ぎ去った過去は後悔するくらいならそれをバネにして前に進め。だが自分のやった事は忘れるな。それがお前が今までやってきた事に対しての出来る事だからな。わかったな？」

「うん、うん・・・」

涙が止まらないよ・・・

本当は伝えたい事があるのに・・・

窓からは光の粒子が空に向かって上がっていくのが映った。世界を構成している粒子が消えていく。その姿はまるで光が舞いを踊ってるようであり幻想的でした・・・

ランツェルは自分の胸に額を当ててる雪に対して

「なあ？雪。」

「何？ランツェル」

「お前の世界の歌でこういうときに景気のいい歌ってないのか？この世界には娯楽が殆ど無いから・・・何か聞かせてくれるか？」

涙が止まらない瞳で、ランツェルを見るとランツェルの体からも粒子が天に向かって流れ始めていた。

「い、いや。消えちゃだ！！」

頭を振りながら温もりを無くさないようにランツェルに抱きつく

ランツェルは雪を抱しめてキスをして落ち着かせてくれた。

落ち着いて周りを見渡すといつの間にか壁だけでは無く、神殿が消えて町も消えていた。

周りには見渡す限りの黄色い菜の花が咲いており、さながら絨毯のようであった。

それを背景に、ランツェルはやさしい眼差しで雪を見つめていた。

「ランツェルは消えちゃうのになんでそんな眼差しで見れるの？。私は怖い、私自身が消えるよりこの温もりが消えるのが怖い。」

それに対しても同じ眼差しのまま、肩に手を置き抱き寄せてくれた。

「そんな事ないさ、俺だってもう、お前に会えなくなるのはつらい。実際、こんなに心臓の鼓動が早くなってる。けどな、お前にやる事があるように俺にもお前の心に決心を与えるって使命もあるんだよ」

「まあ決心って言ってもな、ぶつちやけて言えば俺の好きな女を激励したいって事だけだな」

その言葉を聞きながらも目じりを伝って涙はスカートの上に染みを作り続けていく。それでも、何かを振り切ったような顔で雪は

「もう、ランツェルはぶつちやけすぎだよ。でも私がいつまでも同じ所で足踏みしたら、私をこの世界で必要としてくれた皆の思いに答えられないもんね。」

「だから、私は前に進むよ！本当に短い1歩に過ぎなくても少しづつ前に進むね。」

「ああ。それでこそ俺の好きになった女だ！お前にこの運命を押し付けた奴らにお前の力を見せ付けてやれ」

「うん、わかった！がんばるからずっと見ててね」

それと同時に心の中が暖かいモノに満たされていくのを感じる。

自然と心が思いが記憶が存在の力が魔力が収束し、音が紡ぎ出される。

今ならあの歌詞の意味が少しは分かる気がする。

でもきちんと歌えるか分からないけど・・・私の歌聞いてね・・・
生懸命詠うから・・・

私が歌を歌うとそれに伴い、大地が木が花が光となって空に浮かび消えていく。周りが金色の粒子に包まれていく。

私は、ランツェルを見ながら歌い続ける。

まだ、ランツェルはこっち見て微笑んでくれている。涙が止まらない瞳でそれを見ながらも嗚咽が出そうになるのを必死に堪えて詠う。だってこれが、この世界でランツェルに会える最後になるから・・・

最後のプレリユードを向けて、詩の音律が高まっていく。

思いと願いをのせた詩の旋律が空間を満たし、光を祝福していく。

そして……。

「ありがとう、ランツェルずっと好きだよ。」

「ああ、俺も好きだ。また後（現実）で会おう」

二人は身を寄せて抱き合いキスをした。

そして・・・ランツェルが消えると同時に私の意識も反転した。

.....

ジリリリ お気をつけてください、1番線三鷹行き発車します。

ざわざわ・・・

ホームに戻ってきたのを感じた。千葉駅のホームだった。

周りを見渡しても私が居る場所は最後に居た場所だった・・・

その日は、私は誰にも見られないように千葉の港で深夜泣いた・・・

涙はずっと止まらなかった

私は詠った。私が作りだして、消してしまった光とそして私の心を
やさしく包んでくれた記憶たちに語りかけるように

私はもっと強くなるよ、見ていて・・・だから今だけは、せめてこ
のままで・・・

雪のその姿を星の光と月が照らし続けていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0189u/>

光と記憶へ捧ぐ鎮魂歌

2011年8月3日22時17分発行